

研究助成プログラム 選考委員・助成対象者鼎談

Selection Committee Members Talk with Grantee

桑子敏雄(選考委員長) × 足羽與志子(選考委員) × 富田涼都(助成対象者)

社会の新たな価値の創出をめざして

Exploring New Values for Society

トヨタ財団研究助成プログラムは、2011年度から「社会の新たな価値の創出」をキーワードとして、これからの社会が対応を迫られる困難な課題に私たちはどのように向き合えばよいのか、その基本的な考え方や方法論を原理的に探究し、さらに研究の成果が広く共有されるように努める意欲的なプロジェクトを応援しています。

歴史的変動の時代に直面し、これからの社会のさまざまな課題には、世界を俯瞰し、未来を見通す広い視野から、これまでの考え方や社会のあり方を見直し、私たちがめざすべき価値とは何かを明らかにすることが求められています。社会の新たな価値を創り出す研究とはどのような研究であるのか、有識者から構成される選考委員会および財団事務局では5年間にわたって議論を重ね、また、助成対象者の方々との意見交換を通じ、共通のイメージを深めながら、毎年の選考作業を行ってきました。

このプログラムのイメージを助成対象者の皆さんに改めてお伝えするため、また、これからプログラムへの応募を検討される方々にご紹介するため、「社会の新たな価値の創出」について、桑子敏雄選考委員長、足羽與志子選考委員、そして、2年間のプロジェクトを終えられたばかりの富田涼都さんにお話をいただきました。3名の方の鼎談は、2015年10月某日、富田さんのプロジェクト「農の『豊かさ』を未来に継承するために－在来作物の利用と保全を例として－」において在来作物の比較栽培実験などが行われた、静岡大学農学部附属地域フィールド科学教育研究センター藤枝フィールド(静岡県藤枝市)で行われました。

静岡在来作物研究プロジェクト

富田 本日は、遠路お越しいただきましてありがとうございます。私たちのプロジェクトは、今から2年前、2013年度の共同研究助成に応募し、選考委員会で選んでいただき、2年間で400万円の助成をいただきました。応募をしたのは、私たちは大きな問題意識として「豊かさ」とは何かということに関心があるのですが、人と自然が深く多様にかかわる「農」のいとなみのなかで、在来作物の利用と保全という具体的な事例をとりあげることで、豊かさについて理解を深めることができるのではないかと考えたからです。

「在来作物」という言葉について、プロジェクトでは、先行事例である「山形在来作物研究会」を参考に、ある地域で世代を越えて栽培されて、栽培者自身によって種とりが行われ、特定の料理や用途に使われてきたもの、と定義しました。特に在来の作物であるという認識もなく栽培されている場合が多く、名前も付いていないもの、畑の隅に何となく生えて残ってきたというものもありました。このように顕在化されにくい存在ですので、まずは静岡県内に残る在来作物がどこでどのように栽培され利用されているのか、また、在来作物に付随する技術や文化がどのように継承されてきたのかについて基本情報を掘り起こす作業から始めました。当初、静岡県を網羅的

に調査する予定でしたが、これは早くから作業量が膨大で無理だとわかりました。最初からつまずいたわけですが、その代わりに、プロジェクトで出会ったひとりひとりの方とできるだけ深く付き合っていくという姿勢になりました。このことが、私たちがどっぷりと現場にはまっていくなか、きっかけだったように思います。

調査の結果、50種を優に超える在来作物の存在が明らかになりました。美味しいから大事に育てられてきたものもあれば、日常に溶け込んで、ただ「ネギ」としか認識されてこなかった「在来作物」もありました。同時に、その栽培のされ方、流通の仕方、継承のされ方などが本当に多様であることも明らかになりました。また、在来作物は「継承」が目的となっているのではなく、食べるというらしのいとなみのなかで、技術や文化と共に、自然と受け継がれてきたものが多いことがわかりました。さらに、調査を進めるなかで、現在は主に80代、90代の方々が個人個人で在来作物を継承し、横のつながりが存在しない例が多いことがわかったということも重要な発見でした。

この調査の結果をもとに、これまで受け継がれてきたものをどのように継承していけるのかということについて、研究者だけでなく実際に在来作物にかかわるさまざまな人と共に考えながら、自律的な継承のための場づくりや人材育成の取り組みを進めてみました。



10月下旬とは思えない暖かい日差しの中、丘の上に立つ枝垂れ桜の下で、たわむるミカン畑や茶畑を眼下に眺めながらお話をいただきました。左から富田さん、桑子選考委員長、足羽選考委員。

在来作物のある風景

桑子 このプロジェクトを通じて探究した「価値」とはどのようなものだったと言えますか。

富田 まず、在来作物に焦点を当てることで、その場所や風土、どういう作物が美味しいとされ、どんな場面でその作物が食べられたり、使われたりしているのかといった広範な情報を一体としてとらえることができ、そこから、単なる遺伝資源を残す以上の価値が生まれると考えました。私たちは、これを「在来作物のある風景」と名付けました。

そして、在来作物を継承するということは、在来作物を取り巻く環境や食、技術、文化などの総体としての「在来作物のある風景」を過去から未来へつなぐことであり、農の豊かさも、その風景と、その継承のなかに見出すことができるということがわかりました。そのため、継承のための場づくりや人材育成の取り組みに当たっては、在来作物そのものだけでなく、その風景の継承を強く意識しました。いくら在来作物が大切だと言っても、それを作る人、食べる人などがいなければ、引き継いでいくことはできません。こうした人たちのネットワークを作るため、静岡県内の農家や料理人グループの方々と一緒に在来作物研究の先進地である山形県まで出かけて巡検を行ったり、地元の助産院で在来作物の食べ比べイベントを開催し、未来のママやパパたちに地域の食文化をアピールしてみたりしました。その他、新しい継承の方法をいろいろと試みているところです。

このように、プロジェクトの期間は私たち研究者が中心となり、在来作物を掘り出して価値づけをし、継承をめざすさまざまな取り組みを試みてきましたが、これは、ごく

初期の段階だと思っています。将来的には、価値の見出しや継承が地域の方々の手で行われ、自律性の高い社会が創られていくことこそが、本当の意味での新たな価値の創出になるのではないかと考えています。

価値を「掘り起こす」、「根付かせる」

桑子 初めにおっしゃっていましたが、ここでは「掘り起こす」ということが、まず大切ですね。作物の資源価値だけでなく、それを食べる、使うといった“culture(文化)”をまさに“cultivate(耕作)”する、消えかけて見えなくなっていた価値を掘り起こし、再び命を与えて根付かせるということを見事に実践されているなど思いました。

富田 継承すること、「根付かせる」ことの重要性は当初から感じ、応募企画書でも実施内容として書きましたが、プロジェクトの期間では継承の仕組みを完全に作ることはできませんでした。ただ、在来作物を掘り起こす作業を通じ、その継承が主に個人で行われてきたことがわかりました。たとえば、あるおばあちゃんが種を継いでいて、家のなかでもそのおばあちゃんだけがこの種は大事だからと思って育てている。他の人たちは、そんなことをおばあちゃんがやっていることすら知らない。種を先祖から受け継いできた人たち同士もつながっていませんでした。これは、現場に入って初めてわかったことです。

在来作物が継承されてきた仕組み、ネットワークが存在しないということは、ある意味発見でした。そこで、個人的な考えですが、孤独に取り組むよりもつながりができた方がよいだろうと感じ、当初はプロジェクトの成果報告として研究者が登壇して議論する形式のシンポジウムを予定していましたが、私たちが現場で知り合った方々を



つなぐ場としての交流会に変更しました。お互いにどのような思いを持っているのか、それぞれの土地でどういうことが起きているのか、とにかく交流していただきました。自分がいなくなればこの作物もなくなってしまうと思っている方も、お孫さんが農業を継いでいるとか、若い世代が関心を持ってやっているということを知られて、そういうこともあるのか、という意識の変化があったように感じます。助成期間には、そこまではできたと思っています。本当の目的は、何かを調べ上げるのではなくて価値の創出ですから、人のネットワークなど、多様な側面の成果を残していかなければ、と感じています。

また、使われなくなれば在来作物は途絶えるので、「使う」という新しい出口についても考えています。たとえば、干し芋に利用されてきたニンジンイモと呼ばれる赤いサツマイモについてです。経済的にもう少し意味のあるものになってくれば、若い世代が継承に意欲的になるのではないかと考えています。ただ、単純なブランド作物として経済が回るだけではなく、桑子先生がおっしゃったように、文化も含めたものとしてどのように再生できるか、そして地域を元気にしていけるのか。今年の夏から、今回のプロジェクト参加者以外の大学教員や学生、市民グループが加わり、県内の掛川市の横須賀地区で新たな取り組みを開始しています。助成期間は過ぎてしましますが、来年の夏頃には形になりそうです。これもひとつの答えの出し方かなと思っています。

足羽 交流会には私も参加させていただきました。在来作物に関心を持って参加した方々が、同じ市内の方々でも知らない人同士ということは意外でしたし、交流の場の必要性を感じました。交流会は、何より参加者が生き生きとした様子で楽しそうでした。



富田さん。

富田 財団に提出する実施報告書はもちろんですが、成果としては、ほかに『在来作物と私』という冊子も作りました。私たちもちろん書きますが、在来作物にかかわっているさまざまな方に書いていただきました。文章だけではなく、俳句でも、子どもの絵でも何でもよいので書いていただき、交流会では各自の原稿をお互いに読み合い、在来作物に対する思いをみんなで共有しました。

桑子 お話を伺っていて、プログラムのテーマである「社会の新たな価値の創出」に本当に果敢に挑戦されているなど、改めて感じました。哲学的な話になりますが、「価値」とは人びとが求めている、あるいは求めるべきもののことです。価値の創出には、真に求めるべき「願望」の対象をしっかりと見据え、それに向かってどのように行動するかということが大事ですが、富田さんたちのプロジェクトはその点をうまく表現されていますね。

価値創出のアプローチ

足羽 富田さんたちのプロジェクトには、さまざまなヒントがありますね。プロジェクトを俯瞰的にとらえるためにも、研究助成プログラムが求めている価値の創出にどのような形があるのかを整理したいと思います。価値の創出には2つのスタイルがあると考えています。

ひとつは、富田さんのように、これまでの研究者としての知見を用いて現場に入って、普通は価値と認められないもの、埋もれてしまっているものを掘り出して再検証し、研究者も現場の人も、両方が活力を得る、また実際の価値創出に加わり、価値の創出を促すといった取り組みです。実践的で、市民の活動に寄り添った形が多いように思います。

もうひとつは、実際に起きている現象として価値をとらえ、価値が創出されるプロセスそのものを客観的に分析する研究です。この場合、いわゆるスローフードや和解・共生、環境に優しいライフスタイル、多様性などというオルタナティブな価値だけでなく、近代合理主義や消費社会、偏狭なナショナリズムや宗教対立など、必ずしもよい価値だけではないかもしれませんが、こうした価値創出のメカニズムそのものを理解することを目的とする研究です。たとえば、文化多様性の考え方が文化の個別化・固定化を招いたり、真実やよい価値とされているものが硬直化し、逆の方向にはたらいたりする場合があります。そうした価値創出のプロセスのメカニズムを多様な文脈のなかで追求した研究の成果は、多様な実践の場で参照されうでしょう。

この2つのスタイルは実践面では相互補完的に重なり

合うところも多く、プロジェクトをどちらかに区分することは難しいと思いますが、どちらに比重を置かによって、プロジェクトの特徴が出てくると思います。「研究助成」のプログラムとしては、後者のような研究も促したいところです。

桑子 よりよい価値を求めるために、まずは現状をしっかりと認識すること、その上で、大事なものを失わないようにするにはどうすればよいのかを考えることが重要になりますね。既存の方法では問題に対応できないとき、よりよい方法、目標を表現できれば、それが新しい価値につながるのではないのでしょうか。

富田 足羽先生のおっしゃった価値創出の2つのスタイルについてですが、私も実践に身を置いています。ただ、実践だけにはまってしまうと、「在来作物の継承のためにブランド商品を作ろう」などという目的を設定し、その活動だけに邁進してしまいがちです。本当は、私たちがやっていること、生み出している価値とはどんなものなのかについて、内省的な問いかけが必要であり、求められていると感じますが、これはどうしても見えにくくなってしまふ点ですね。

そのようなとき、当事者と目標を共有しつつ、研究者として一歩引いて俯瞰的に考えることが必要なのだと思います。在来作物には、作りにくかったり、味にクセがあったり、ネガティブな面もあり、埋もれてしまうだけの理由もありました。どうして作っているのかと尋ねると、貧しくてこれしかなかったからということもあります。絶対的によいものだから継承するというスタンスでは、在来作物を実際に継承してきた人とも距離ができてしまいます。過去から受け継いできたものを根本的に問い直し、プラスマイナス両面を受け止めた上で、継承について考える。在来作物にかかわるさまざまな方に冊子に寄稿していただきましたが、多様な声を多様なまま残しておきたいという思いがありました。在来作物の多様な側面を認識した上で、そこから見出される「豊かさ」を未来につないでいくためにはどうすればよいのか考え、その問いかけの結果を実践の場に再び戻していく。私たちは、このように実践と研究の行き来を繰り返しているのだと思います。

トヨタ財団の研究助成プログラムは、研究をやりなさいとか、その逆に実践だけをやりなさい、というのとは違い、それが両輪となっているプログラムだと思います。そ



左から桑子選考委員長、足羽選考委員。

して、その点がプログラムのよいところでもあり、難しいところでもあると感じています。

桑子 以前、トヨタ財団が開催したワークショップで、価値の創出は誰がどのようにやるべきなのか、具体的な方法論を教えてくださいという質問を受けました。新たな価値の創出について研究してくださいというのは、研究を通じて新たな価値を創り出してくださいということでもあります。研究者は思想として、理論的な研究をやらなければいけないと思われがちですが、トヨタ財団の助成では、必ずしもデスクワークや文字化をしてほしいということのみならず、当事者として、身体的に空間に入って思考することもひとつの価値創出の形だと思います。また、そこから生まれた提案により人が動かされること、人を動かす力になるものを生み出すことがもうひとつの価値創出だと考えています。そのような思いのもとで、応募者の方々には単に理論を出すだけではなく、創造的な活動をしてください、というのがプログラムの投げかけです。どんな内容や方法論であるかは、皆さんに考えてほしいと思っています。

足羽 価値の創出を問いかけて実践する研究と言いますと、2016年のノーベル賞を受賞された大村智先生（※1）の「人のためになること」がしたかったという言葉が思い浮かべます。普通は研究者の意識にこうした思いはあっても、なかなかはっきりとは口に出しにくい言葉です。この思いは、「価値の創出」を意識する研究につながるのだろうと感じました。自分の研究していることが実践的な場面でどのように展開し、「人のためになる」のか。直接的な研究姿勢や人のためになるような研究を行うこと、そのことが価値の創出につながるのではないのでしょうか。

普遍的な意味を問う

桑子 少し話は変わりますが、研究助成プログラムの選考を行うとき、そのプロジェクトが設定した課題や対象とする地域が非常に限定的で、広がりや普遍性が感じられない、ということがよく議論されます。富田さんのフィールドは静岡県ですが、たとえば、農業のグローバル化が進んでいなかで、在来作物をどう位置づけるか、政策として見捨てるのか、保護していくのかといった視点を入れることで、プロジェクトとして、大きなグローバルな問題のなかでのステータスも持ちうるのではないのでしょうか。

足羽 そうですね。富田さんたちのプロジェクトには、一般的には別分野と見られている問題の解決へとグローバルに展開できるヒントがありますね。私が長年携わっているスリランカでは、民族間の紛争と内戦の後、国内難民の帰還、再定住、コミュニティの再建という難しい問題を抱えています。富田さんのお話をお伺いすると、難民の定住や帰還に併せて、たとえば、人びとになじみのある在来作物も一緒に地域に導入することで、かつてのくらしや文化を取り戻し、それがコミュニティ形成の重要なコアになるのでは、と思いつきました。

富田さんたちが取り組まれてきたことから、世界中に活用可能なアイデアをたくさん見出せると思います。これから研究助成プログラムの助成を受ける方々には、自分たちの研究が普遍的にどのような意味を持ちうるのか、それを小さなローカルなものとして限定するのではなく、広い視野をもってとらえていただきたい。そうすると、また別の可能性も見えてきますね。

富田 在来作物が継承されずに消失するという事象は、むしろ途上国でより深刻であると聞いています。私たちのプロジェクトの現場はローカルですが、普遍的に起きている問題について、価値の問い返しを行うことを意識してきたつもりです。

足羽 現代社会では、世界中でさまざまな問題が共時的に起きているので、日本より早いとか遅いとか、そのような話ではなくなっていますよね。私は、地域で受け継がれてきた知恵についても同様のことが言えるのではないかと考えています。

富田さんたちの研究プロジェクトでも注目されている、浜松市の水窪地域の民俗研究者である野本寛一先生(※2)は、『自然と共に生きる作法—水窪からの発信—』(静岡新聞社)という著書で、水窪という山間地域で継承されてきた生活の知恵や技法を数多く紹介されています。そのなかに「新月伐採」についての記述があります。新月の夜に伐られた木は虫に強く、長持ちするのだそうです。

同じような慣習はドイツでも、またアジアでもあるのですが、はるか海を越えた文化も異なる地域で、同様の経験知が蓄積され、継承されてきたことに驚き、感動を覚えました。

このように世界各地に存在する知恵を「資源」として共有するという観点から、目に見えるものや空間としてのコモンズだけではなく、たとえば「知恵のコモンズ」などというものを考えてみると面白いと思います。グローバルな知恵のコモンズの蓄積に貢献しようというマインドを持ち、あちこちに存在する価値を掘り起こしたりつなげたりする。そのような役割も研究者にはあるのかもしれない。

成果の発信から価値の創出へ

桑子 これから研究助成プログラムに応募される方のためにも、プロジェクトの成果物のイメージについて触れたいと思いますが、学術論文は、広く読まれ、次の研究につながるようなものであればよいのですが、点数稼ぎにはなるけれど、誰も読まないような論文ではよくない。研究助成プログラムでは、新たな価値の創出を求めていますので、助成を行ったプロジェクトに対し、既存の学界の評価軸のみで評価するのもおかしいと思います。富田さんのプロジェクトでできた冊子や交流会、そのほか、映像媒体や多様なイベント、もちろん論文もですが、多様な成果を総合的に判断するべきだと思っています。研究成果が社会のあり方にどのように貢献するのかということ意識してほしいですね。

ところで、プロジェクトを評価するというのは難しいことですが、この2年間、トヨタ財団が助成対象者を集めたワークショップを開催してくださり、採択したプロジェクトを改めて評価する場ができました。助成対象者の皆さんも、プログラムの趣旨についてより深く理解する場になったと思いますし、同時に、私たちの選考への評価の場でもあったと感じています。

富田 私もワークショップには2回参加しましたが、そこで、トヨタ財団には初期から掲げられてきた「先見性(foresight)」、「市民性(participatory orientation)」、「国際性(international perspective)」という基本的な方向性があることを伺いました。これらが脈々と受け継がれ、実践されてきたことがトヨタ財団への信頼につながっているだろうと感じました。私たちのプロジェクトでは、特に「市民性」の部分を重視したわけですが、応募者の立場からは、この積み重ねられてきたものを財団にもっと打ち出していたいてよいのではないかと思います。そうすることで、応募する側も、企画書を作成する際に、求められている実施内容や成果物についてのイメージを明確にできると思います。

足羽 成果物については、この研究助成プログラムは、従来の「研究」およびその成果という考え方の問い直しにもつながると思います。このプログラムは「研究助成」ですが、応募者を大学の研究者に限っていませんし、共同研究助成の枠では研究者と行政や民間の方々のコラボレーションもよく見られます。学会発表や論文以外の成果は大事ですが、単に多様な成果物を出すのではなく、プロジェクトがめざしている新たな価値の創出にそれらがどのように結びつくのか、ということも新たな研究スタイルの創成として、応募の際に説明していただくのもいいですね。これがトヨタ財団ならではの「研究助成」の成果だと、応募者が示してほしいものです。もちろん学術論文も重要ですし、研究の成果を世に問うことで、初めて価値が創り出されると考えています。

桑子 そうですね。富田さんもさまざまな成果を出されていますが、論文も書かなければいけませんね(笑)。

富田 はい。少し時間が必要ですが、そのつもりです。たとえば、文化の継承ということをどのようにとらえるのかということについて、今回は壮大な実験をさせていただいたようにも考えています。将来的に、人が何かを栽培して生きていくことの意味、その豊かさ、というテーマで、ぜひ論文をまとめたいと思っています。これまで、環境保全の場にはかかわってきましたが、農業生産の場に関しては具体的な現場を持っていたわけではなかったので、今回のプロジェクトを通し、現場に身を置いて考えることができたのは本当に大きな収穫でした。そこで得られたものを、研究者として俯瞰的にとらえ、わかりやすく発信していきたいと思っています。

在来作物を「掘り起こす」ため、掛川市や南伊豆町などで配布されたポスター。



自由な発想によるチャレンジを

桑子 富田さんのお話を伺っていて気が付きましたが、トヨタ財団の研究助成プログラムでは、新たな社会を導いていこうとする実験的な取り組みに助成していると言えるのかもしれませんが。失敗するかもしれないものに助成をすることは勇気がいることですが、研究助成プログラムは、新しい考え方の仮説を立てて、果敢にチャレンジする機会を提供していると言えますね。

足羽 トヨタ財団の研究助成プログラムは、研究者がある価値観の上に立って研究に取り組むことを積極的に支援しているのだと思います。

そもそも、研究をする以上、研究とは何か、研究者がすべきこととは何かということについて、常に自らに問いかけることが大事です。研究は価値中立的であれと言われることがありますが、研究者自身も何らかの価値観のもとで生きているし、そして、それを研究する価値があると思うからこそ研究をしているのです。価値から自由にはなれないのですから、むしろポジティブに、そのような自分自身を客観的にとらえながら、新たな価値を生み出す研究にチャレンジする、そのような姿勢が求められるのではないのでしょうか。

桑子 選考委員長を5年間務めてきましたが、自分が助成を受けるのであればこのようなプログラムがいいなという思いでかかわってきました。多様な参加者や協力者が集まり、自由な発想を出し合って共有する、既存の学問の枠内にはなかなか収まらないようなものを求めてきました。最近の応募では、国際共同研究や大学の研究者だけではないメンバー構成の研究がますます増えてきましたが、そのような多様性のある研究を積極的に受け入れる、それがトヨタ財団のイメージになってきたことはよいことだと思います。

在来作物へのさまざまな思いを集めて編まれた冊子『在来作物と私』。



次なる高いステージへ

富田 今回のプロジェクトでは、通常であれば会うこともなかったような方々とひとつのテーマのなかで仕事ができたと、その経験を通じ、プロジェクトのメンバー同士でも深いつながりが生まれたことが大きな収穫でした。当初の計画になかった交流会や冊子の制作も、財団のプログラムオフィサーの方と相談しながら実施することができました。私は、答えの出し方は論文だけではない、プロジェクトから生ま

れる成果は研究者だけのためのものではない、と考えていましたので、トヨタ財団の研究助成プログラムが求めている成果のイメージは、私のやりたかったことにとても近かったと感じています。

このプロジェクトから生まれたいわねりを、今後どのようにつなげていけるのか、思いや願望だけでなく、何らかの研究・活動資金を用意できるかという点も含めて、どのように継続していくのかということが、目下の課題だと思っています。

桑子 研究助成プログラムは、単なる継続ではない、発展的な内容の企画であれば、再度の応募も歓迎しています。今回のプロジェクトを踏まえ、次なる高いステー



富田さんより在来のサツマイモについて説明を受ける桑子選考委員長と足羽選考委員。

ジへの展望を描けるようでしたら、将来、ぜひまた応募を検討してみてください。

足羽 プロジェクトを進めてきたなかで、代表者としてのプロジェクトマネジメントが重要だったと思います。プロジェクト終了後も、富田さんがどこまでかわかり、どこから話すのか、ということがとても大切になってきます。今回のプロジェクトを通じての富田さんの「もうひとつの軸足」を使って、確実に次のステージへ進まれますことを期待しています。また、研究助成プログラムについても、「社会の新たな価値の創出」をコンセプトとして、一層充実した展開となることを期待します。

富田 はい。本日はどうもありがとうございました。

※1 大村智(おおむら・さとし) 1935年生まれ。北里大学薬学部教授、社団法人北里研究所所長などを経て、学校法人北里研究所名誉理事長、北里大学名誉教授。寄生虫病に対する新しい治療法の発見により、2015年にノーベル生理学・医学賞受賞。

※2 野本寛一(のもと・かんいち) 1937年生まれ。静岡県出身の民俗学者。近畿大学付属民俗学研究所所長、柳田国男記念伊那民俗学研究所所長などを務め、現在は近畿大学名誉教授。2015年に文化功労者として表彰。

桑子敏雄

KUWAKO Toshio

東京工業大学大学院
社会理工学研究科教授



専門は哲学、合意形成学。主な著書に『社会的合意形成のプロジェクトマネジメント』(コロナ社)、『生命と風景の哲学』(岩波書店)、『空間の履歴』(東信堂)、『風景のなかの環境哲学』などがある。2011年からトヨタ財団研究助成プログラム選考委員長を務める。

足羽與志子

ASHIWA Yoshiko

一橋大学大学院
社会学研究科教授



専門は文化人類学。アジアを中心に平和構築、宗教、アート等を通じた社会変化と価値生成の研究を行う。編著に Making Religion, Making the States (Stanford Univ. Press)、『平和と和解の思想をたずねて』(大月書店)など。トヨタ財団研究助成プログラム選考委員(2012年度～2015年度)。

富田涼都

TOMITA Ryoto

静岡大学大学院
農学領域准教授



専門は環境社会学、環境倫理学、科学技術社会論。2013年より「静岡在来作物研究会」を主宰し、静岡県内の「在来作物」に関する研究や実践に取り組む。2014年、初の単著『自然再生の環境倫理』(昭和堂)を刊行。

